

地域博物館における来館者の利用状況と意向に関する研究 その2

—八戸市美術館を事例として—

正会員 ○石川宏之\*

地域美術館            利用者                    利用圏域  
リピーター            立ち寄り場所            美術書の所持数

1. 研究の目的と方法

今日の地域美術館は、地域住民のアイデンティティの形成を図り、衰退した中心市街地を活性化するための新たな集客施設としての役割を期待されている。これまでの既往研究として、美術館の展示方式とその構成に関する研究<sup>1)</sup>や、美術館の展示壁面の配置方法と利用者の評価に関する研究<sup>2)</sup>などが見られる。

本研究では、地域美術館における市民の利用状況と意向を捉えリピーターを増やし、中心市街地を活性化するための手がかりを得ることを目的とする。

研究方法として、先ず美術館における利用者の属性を把握し、利用者の要望と立ち寄り状況を捉える。調査対象は八戸市美術館<sup>3)</sup>とする。2006年10月31日～11月5日の期間に、八戸市美術館利用者に対してアンケート調査を実施した。回答者数は325人で、その概要は以下の通りである<sup>4)</sup>。

表1 回答者の属性 (単位:人)

	若年層 29歳以下	中年層 30～59歳	高年層 60歳以上	合計
合計	25	141	159	325
割合	8%	44%	48%	100%

2. 美術館利用者の属性及び要望

2.1 利用者の属性と美術館の利用回数

図1から利用圏域をみると、美術館を中心として遠くなるほど利用者数は減少する。年齢層でみると、八戸市北部を除く4つの地域において高年層の占める割合が大きい。また、図2から美術館への交通手段をみると、高年層は、自動車の他にバスを利用する割合が大きい。このことから、高年層は、公共交通の良し悪しで美術館の利用に大きく影響されると考えられる。

図3から3年間における美術館の利用回数をみると、2～3回と回答した利用者が最も多く、4回以上の利用者数は148人と全体の5割弱がリピーターである。しかし年齢層別にみると、利用回数が多くなるほど高年層の利用者の占める割合が大きくなる。図4から利用者が持っている美術書の冊数との関係を見ると美術館の利用回数が増えるにつれて多く美

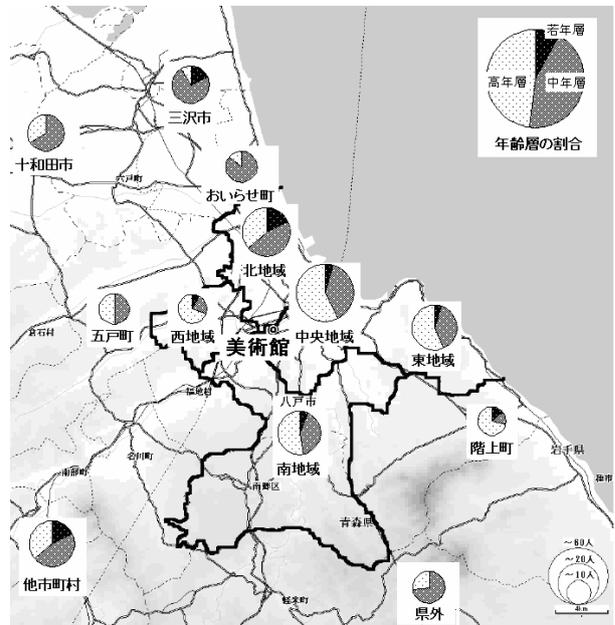


図1 利用者の利用圏域

\* 円の大きさは美術館に訪れた利用者数を表す。

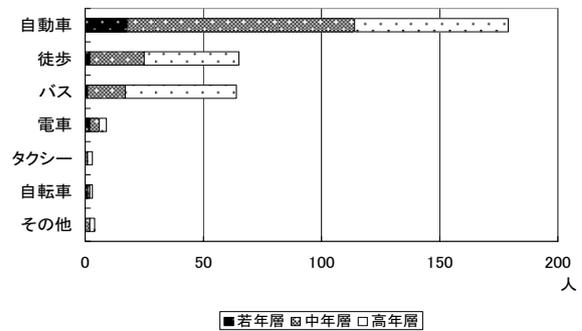


図2 美術館への交通手段

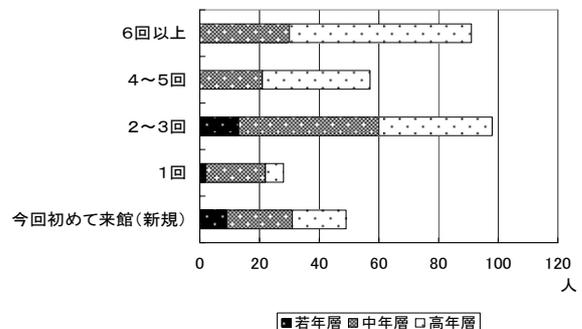


図3 3年間における美術館の利用回数

術書を持っている人の割合が大きくなり、リピーターであることが分かる。よって高年層で多くの美術書を持っている人がリピーターになると思われる。

## 2. 2 利用者の要望

図5から美術館へ来館するにあたっての要望をみると、駐車場を増やしてほしいという回答が最も多い。続いて市の広報や新聞・テレビなどで常設展、特別展について宣伝を増やしてほしいという回答が多く、中年層の占める割合も大きい。以上のことから利用者は美術館に対する車でアクセスの改善と美術館の催しについて多様な情報提供を望んでいる。

図6から美術館の施設に関する要望をみると、「常設展示室を広げてほしい」が最も多い。年齢層別にみると、高年層は「軽食をとれるレストランがほしい」の占める割合が大きいことから、喫茶的な場所で休憩し、展示について語り合える場所を望んでいると思われる。

## 2. 3 利用者の立ち寄り状況

図7から利用者の立ち寄り場所をみると、八戸市中心市街地に立ち寄る利用者が全回答者の約50%という結果が得られ、八戸市美術館利用者は近隣のデパート等への立ち寄ることがわかる。

## 3. まとめ

これまで地域美術館の利用者の属性及び要望をみてきて3点が指摘できた。

- ①美術館に近い地域ほど利用者数が多い。高年層の多くはリピーターで、公共交通によるアクセスの良し悪しに影響される。また美術書の所持数が多い利用者ほどリピーターになっている。
- ②リピーター増やすためには、中年層では駐車場を増やすことや展示室を広げること、高年層にはレストランを設けることが必要である。
- ③利用者の多くは、中心市街地のデパートへ立ち寄っていることから、リピーターを増やすために近隣デパートに展覧会の案内ポスターなどの掲示が重要である。

以上のことから八戸市美術館は、施設面の改善はもちろんのこと、中心市街地に立ち寄っている利用者が多いことから、近隣デパートと共同で展覧会を開くなどの積極的な活動を行うことでリピーターを確保し、中心市街地に訪れる人が増え、八戸市中心市街地活性化につながると考えられる。

謝辞 本研究をまとめるにあたり沢田聖君(元八戸工業大学卒業研修生)に担うところが大きい。ここに記して感謝の意を表す。

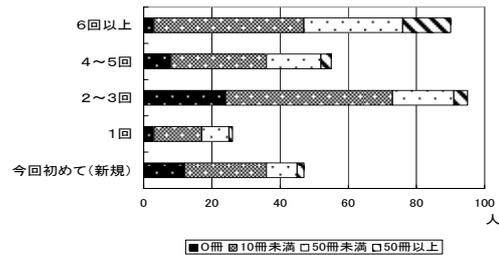


図4 美術書の所持数と利用回数

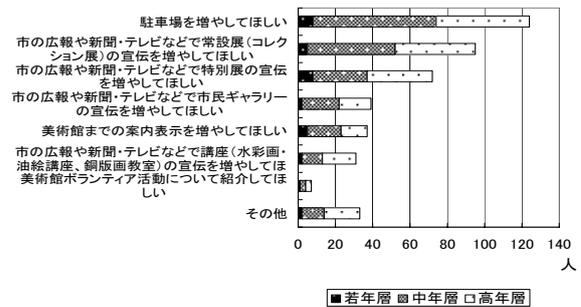


図5 来館にあたっての要望

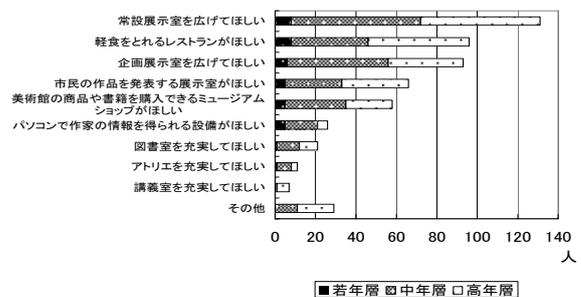


図6 施設面に関する要望

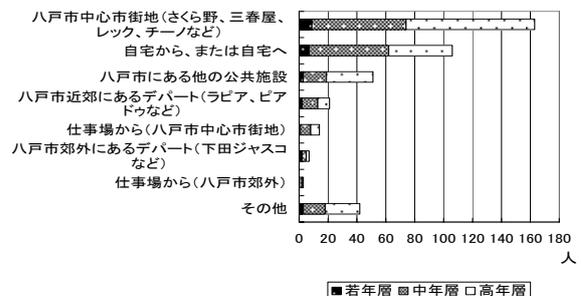


図7 利用者の立ち寄り場所

### 補注

- 1) 林采雲・栗原嘉一郎：美術館における展示方式の構成とその特性：日本建築学会計画系論文集第421号1991年3月 pp63~68.
- 2) 仙田満・他3名：美術館展示室の建築計画的な研究：日本建築学会計画系論文集第517号1999年3月 pp145~149.
- 3) 1986年に八戸市は、大蔵省から旧八戸税務署跡地建物等の買入れ、改築工事を行い、八戸市美術館として開館させた。
- 4) 調査期間中に特別展「京の四季」が催され、調査期間の入館者数は514人で、回答者数は325票(回収率63%)であった。

\*八戸工業大学工学部建築工学科講師 博士(工学)

\*Lecturer, Dept. of Architectural Engineering, Faculty of Engineering, Hachinohe Institute of Technology, Dr. Eng.